筑後川彩雲

西村聡淳

一、

南の空に湧きだした積乱雲が、いつのまにか空一杯に広がって、雷鳴をとどろかせながら激しい雨を叩きつけてきた。

会社の勤めを終えていったん家に帰った岡田康介は、夕立の上がるのを待って約束の割烹料亭へ向かうことにした。七月末のその日は会社の取引先である坂本木材店の社長から、自分の姪の奈緒子を紹介される約束であった。

陽が沈んだ後の西の空には、まだ僅かに明るさが残っていた。雨の通り過ぎたばかりの町並の広い通りを歩くと、かすかに渡ってくる風がひんやりと頬をかすめ、新鮮な水の匂いが感じられる。その店までは歩いて十分とかからぬ距離であった。

遠くの方で、まだ残業をやっている木工所の自動鉋(かんな)の音が聞こえてくる。軒先に大きく張り出したイチジクの樹の下に縁台が置かれ、碁仇(ごかたき)を前にして盤面に目を注ぎながら、うちわを片手に涼を取っている男たちの姿や、しゃがんだまま顔を寄せあって線香花火をじっと見つめている幼い子供たちを見て歩きながら、康介はいったいどんなことを話せばいいのかと不安に駆られ始めていた。

坂本社長の側に並んで坐った奈緒子は、袖なしの白いブラウスに小さな白い水玉模様の紺地のスカートで、肩先から露わになった二の腕が健康そうであった。柔らかそうな髪は後ろに束ねて黒いリボンで結び、背の中程まで垂している。恰幅のいい坂本社長と太った番頭の友岡は開襟シャツの姿で扇子をしきりに動かし、部屋の隅では二台の扇風機がせわしそうに首を振っていた。

奈緒子は殆ど口をきかなかった。黒い絹張りの小さな扇子を拡げて、口許に何かホクロでもあるのか、顔の下半分を隠すようにしながら目だけをじっと此方に向けていて、時々思い出したようにそれを僅かに動かしている。何か問いかけても言葉少なに

答え、小さく笑うだけである。
康介は自分の仕事を話題にし、また好きな音楽や絵画について話したりして自分のことを分かってもらおうと努力をするのだが、彼女の方はあまり話に乗って来ようとはしない。これでは相手のことは分かる筈もない、と彼は不満を覚えただけに終ってしまった。

翌日になると、番頭の友岡が電話をかけて来た。一度映画にでも行って、いろいろ話し合ってみたらどうかと言うのだ。康介はあまり気が進まなかったが、次の日の夕刻に映画館の前で彼女と落合うことにした。
戦後十年が経って世相も落着きを取り戻し、映画は唯一の大衆娯楽として、どこの映画館も満員の状態であった。映画館に着いてバスを降りると、奈緒子はすでに入口で待っていた。今日は、スカートの裾に小さなフリルを二重にあしらった淡い花柄のワンピースである。だが、彼女のやや冷たそうに見える端正な顔を見たとたん、その目がじっと自分に注がれているのに気づいて康介は戸惑っていた。
二人分の切符を買うと、彼は先に立ってさっさと奥へ入って行った。まだ時間が早いせいか、客席はわりに空いていたので、中ほどまで行ったところで、中央よりやや右に寄った場所に席を見つけると、康介は左に席をあけて座った。
奈緒子はその時も同じように、自分のほうから話しかけようとはしなかった。康介のほうから話しかけても言葉少なに返事をするだけで、顔は前方を向いたままである。しかし、その横顔を時々チラリと眺めていると、ちょっと冷たそうな顔がまた清潔な感じにも見えてきて、彼は少し好感を持ち始めていた。
映画はたいして面白いものではなかった。一本だけを見終るとまだ八時を過ぎたばかりである。康介は彼女を促すとそこを出た。映画館から伯父の家までは約一キロほどの距離なので、康介は彼女を家まで送り届けることにした。
伯父の家まで行く途中に、川に面した小さな社(やしろ)があった。表通りから十メートルばか
り入りこんでいるのであまり人目にはつかない。お宮の入口にあった石灯籠の側でしばらく話をしようかと言ってみると、素直にこれに応じたので、灯籠の石段にハンカチを敷いて彼女を座らせ、自分もその横に座った。
五、六メートルほど先はもう川岸で低い石垣となっており、その向こう側に対岸の家の灯りを水に映して、黒い川の水がゆっくりと動いていた。見上げると、東の空にぼんやりと十三夜の月が浮かんでいる。やわらかな月の光が地上の家や樹や橋や川を

照らしていた。向こう岸には葦の葉が生い茂って石垣は見えないが、その上に建った家々が、遠く川の湾曲する辺りまでぼんやりと黒く浮き上がっていた。

「伯父さんの家にはよく来るんですか？」

「そうですね。普通めったに来ることはなかもんね……。年に二回くらいかな。でも、伯父が私にはとてもよくしてくれるんです」

今度はその伯父が会わせたい人がいるというので佐賀県の隣町から出て来たが、いつも四、五日は泊って気ままに過ごすのだという。

康介が次の言葉を探していると、とつぜん奈緒子が彼の方を向いて言った。

「あのう……。足がちょっと悪かという話を聞いたばってん、事故か何かでそうなられたんですか？」

思ったことをはっきり言う女だな、と康介はちょっと身構える気持ちになった。

「そのことをあなたに言っておかなければと思うとったんです。――あれはもう五年ほど前のことになるかな、脚の力が少しずつ弱ってくるとに気がついたとは……。大学病院で診察を受けて、やっと分かったとばってん、進行性筋萎縮症といって、両腕と両脚の筋肉が少しずつ細くなって行く病気だと言われたんです」

康介はその時の様子を詳しく説明した。検査の為にすぐに入院したが、この病気は筋の栄養をつかさどる自律神経の変性によるもので、まだ治療法が発見されていないため現在では治る見込みがないということであった。

この病気には幼児型や青年型など幾つものタイプがあり、大腿部や上腕部から細くなり始めるものの外、手脚の末梢から始まる脊髄性のもの等があることも後になって分かったが、初めて診断を受けた時には「あと五年くらいしか生きられないのだから、今の内にうまい物を食って、したいことをしておくことですね」と言われて、目の前が真っ暗になってしまった。しかし、対症療法として考えられるものをすべて試行錯誤しながら治療を続けた結果、進行速度はかなり遅くなった。それに、二年ばかり前に知ったN式健康法を始めてからは、病気の進行が殆ど止まったように思われる状態となっていた。

康介の継母ミツの話も出た。生母はまだ生存しているが、事情があって六歳の時に別れたままで、今の母親ミツが来たのは小学五年生の時であった。彼女は思ったことをすぐにそのまま口に出すので、周りの者も時には腹を立て、非難する者が多かった。父の佐太郎もまた彼女の言葉には逆らわないので、近所のミツの評判はあまりいいものではなかった。康介は、実母ではないという遠慮もあり、自分の主張を引込めることによって、穏やかな親子関係を維持していたといってもよかった。

それを聞くと奈緒子は、何か心に触れるものを感じたのか、自分のことを話し始めた。

彼女の母親は十歳の時に亡くなったという。母のすぐ下の妹が後添えとして来ていて、気持ちの上での負担はなかったが、父には腹違いの弟がいて万事に抜け目のない男だったので、人のいい父親は親から引き継ぐことになっていた雑貨店の仕事を弟に譲り、自分は裏の離れに引籠もって本を読んだり釣りに出たりという毎日だった。

弟の嫁ユキが勢いづいてくるのは当然である。奈緒子の弟が結核を病んで入院すると、このユキ叔母の彼女に対する嫌がらせが激しくなった。奈緒子が娘らしく成人するとこの扱いは次第に露骨になり、新しく作った服をよく似合うと人が褒めると、「何ば着ても、あんたは似合わんね」と嫌味をいい、少し変わった髪型にすると、「人のせんごたる変な頭ばして、あんた、人から笑わるっよ」といやな顔をした。

時には、奈緒子が干したばかりの洗濯物を、ユキ叔母が物干し竿の端までさあっと片寄せては、自分の物を拡げて干すこともあったのだった。

互いに家族のことを話してみると、思いの外に考え方が似ていて話がよく合った。二人とも母親のいない淋しい思いをしてきた身である。自分の体験してきた人生の影の部分である辛さや苦しさを、身に沁みて知っている人であれば、苦労を共にすることもできると思うのだ。

いつのまにか月がだいぶ高くなった。黒い川の流れがゆっくりと動き、向う岸の家が浮き上って見える。家々の窓の灯りが半分近くに減っていた。

奈緒子は、自分の言うことに相槌を打ちながら親身になって話を聞いている康介に好感を持ったのか、顔を上げると言った。

「あなたとはよく話が合いそうね。何でもよく解ってくれて、ほんとにお兄さんのような感じ……。でも結婚となると、何かもっと違うものがあるような気がするとよね。あたいはほんとのことを言うと逞しい人が好きなんです。――悪く思わないでね」

そうだったのか。それが当然だろうと康介は思った。

「おれの方もやはり自信がないね。ほかの人に較べればわりと自由にものを考え、はっきりとそれを言葉にするあんたと、毎日を一緒にやって行けるとかどうか……。この話はもう、初めから無かったことにしとこうね」

康介はそう言いながら、自分の言葉に空虚なものを感じていた。言葉は結局言葉だけに過ぎず、互いの思いは伝わらないのだ。

康介はそれだけを言うと黙って立ち上がった。奈緒子も続いて立つとスカートについた塵を払った。

父親の佐太郎は、建具職人として田舎には惜しい優秀な技術を持っているというので、ちょっと大きな家になるとよく仕事が回されて来ていた。佐太郎が完成も近い家に出かけて行って建て主と会い、デザインを打合わせて家に帰ってくると、その見積り書を作るのが康介の役目である。彼はいつも家へ帰って食事を終えると、机に座って父の話を聞きながら建具のデザインや金額を書き込んだ。

この日も事務所と応接間を兼ねている玄関脇の八畳の間に入って、父の出してきた書類を手に取ると、康介はゆっくりとこれに目を通し始めていた。奈緒子から電話があったのは、ちょうどそんな時だった。あれからまだ二日しか経ってはいない。

「奈緒子です。いま、近くの公衆電話からですけど……。坂本の伯母も一緒で側にいます。今夜は十五夜で月がきれいかけん、夕涼みに散歩に行こうか、と言うのでここまで来たところなんです」

奈緒子が一語一語ゆっくりと間を置きながら言うのを、康介は黙って聞いていた。

「岡田さんの家の前を通ってみようか、と伯母に言われて、いまそちらを回って来たとばってん……。そしたら今度は、ちょっと電話をしてみたら、と言うんです。――いま、ちょっと出られますか。忙しかとでしょう？」

自分にはその気はないが、伯母に言われたから、という言い訳のようにも聞こえた。彼女とは、この前会った時に、もう話はついていた筈である。だが断るのもまたへんな気がした。

「そんなら、花宗川の橋の上で待っとりますから」

と言うと電話は切れた。

怪訝（けげん）な顔をしながら、受話器を持ったままの康介を見ている父親に気がつくと、

「この前会うた奈緒子さんからやったったい。ちょっと行ってくるけんね」

と言いながら康介は受話器を置いた。見合いの結果が気になっていた佐太郎はそれを聞いて安心したのか、表情を和らげながら再び書類に目を戻した。

だらだら坂の県道を爪先上がりに歩いて行くと、コンクリート造りの花宗橋に出る。その長さは三十メートル近くもあるだろうか。橋の中央部に、帆船が橋の下を通過する時には、ギヤーのハンドルを手で廻せば片方が上がるようになっている八メートルほどの鉄の橋桁があった。跳ね橋である。橋桁が上がれば車も人も通れなくなるのだ。骨組みは鉄骨だが、上側は厚い丈夫な板を張っただけなので、人が通る度にごとごと

と戸を叩くような音がした。
橋にさしかかると、左手の欄干に添った中ほどに二つの黒い影が動いた。坂本の伯母と奈緒子だった。坂本の伯母は康介の方へ歩み寄ってくると、
「いつもお世話になっております。そして今日は、お忙しいのにお呼び立てしてどうも済みません……」
と何度も頭を下げた。坂本木材は康介の父佐太郎の、材料の仕入先でもあったのだ。
「そんなら私は先に帰っとるけんね」
そう言って大きな紙袋を奈緒子の手に渡すと、人のよさそうな伯母は、また何度も頭を下げながら去っていった。
「伯母はいつもあんなふうに何でも押しつけてしまうとよ」
奈緒子が紙袋から取出したのはバナナと殻付きのピーナッツであった。
筑後川の支流であるこの葦の葉そよぐ花宗川の上流には、いま地上から浮き上がったばかりの、白く冴えたまるい大きな月があった。川面に映った月の影が、微風にさざ波を起こして千々に割れ、砕けて揺れながらきらめいている。康介は、このほの明るい乳色の靄に包まれた夜の中に身を置いて、現実とかけ離れた青白い月を見ていると、魂が体から抜け出して、夜空を高く昇って行くような気がした。
「いま何ば考えよったとね？」
奈緒子が康介の方をふり向くと言った。
「うん、月はどうしてこげん、人の心に沁み入ってくるとやろうかと思うてね」
「あたいも……。こんな夜にはもう家の中にじっとしておられんごとなってしまうとよ」
「月の魅力に逆らいきれず、ふらふらとさ迷い出てしまうわけたいね」
奈緒子がもいでくれたバナナを口に入れてみる。遠い南国の甘く熟れた何とも言えない香りが鼻腔に拡がった。
「伯母さんはいったい、何ば考えよらすとやろか」
康介はこうして奈緒子を誘い出した伯母の気持ちをまだ計りかねていた。
「さあ……。伯父さんが世話しよる話やけん、なるべく話がまとまるようにと思いよっとやろね。それであなたの家ば見せに連れて行ったとよ。でも、古い昔風の造りやけん、お掃除がたいへんやろうね」
なるほど。康介の家が経済的にも安定していることを見せたかったわけだ。彼は坂本の伯母の気持ちも解る気がした。しかし、家を見たところでどうなるものでもあるまい。彼女の意志はもう決まっている筈だった。

奈緒子がふっと大きな吐息をついて言った。
「あなたの身体がもし良くなればね……。そしたらあなたもきっと嬉しかよね」
「そりゃあ当たり前さ。ばってん、いつまでも病気に負けてなんかおられんからね。治せるかも知れんという方法があれば、おれは何にでも挑戦するよ。それに、一度しかない人生やからね。僅か五十年の人生を、悔いのないように生きてゆく意欲があるかどうかということたい。天から与えられた能力を充分に生かし切って、どれだけ自分のいのちを燃焼できるか、要するに力強く生きてゆくかどうかは自分に対する自信の問題じゃなかろうかね」
彼はいま、もうひとつ是非やってみたいことがあった。それは健康法の一つで七種類の生野菜をすり潰して飲む「生野菜泥状汁療法」というものだが、葉緑素とエントロピーの法則によって細胞の賦活化を計り、体液を弱アルカリ化することによって病気を治すというものだった。自律神経のアンバランスを正常にする「温冷浴」と併用すれば、ある程度の効果は期待できると彼は思った。だが、継母のミツはそんな面倒なことなどやってくれる筈もなかった。十数年前、別の病気で永い入院生活に苦しんでいた時、お前のような親不孝者はもう早よう死ね、と何度も言われたことをまだ忘れてはいない。
そこで折を見て、この療法を行っている広島の病院へ行くことが彼の念願であった。
「この療法は、やってみんと分からんことばってんね。必ず治るとは言えんとしても、進行だけは間違いなく阻止出来ると思うよ」
いつのまにか彼は雄弁になっていた。それは彼女に対してというより、自分自身に言い聞かせている言葉でもあった。
空に昇って行くにつれて十五夜の月は少しずつ小さくなり、いよいよ冴えわたって行く。星ひとつ見えない、真昼のような明るさの中で、康介は奈緒子の視線がじっと自分に注がれているのを感じていた。

二、

橋の上で会ってからまもなく、康介は奈緒子に手紙を書いた。それは何ということもない普通の手紙だったが、短い手紙のあとに「あなたのことをもっとよく知りたい。ぼくのこともまだよく分かってはいない筈だ」と書き添えることを忘れなかった。
すぐに奈緒子から返事が来た。それには「お兄さんとしてお友達になりたいと思っているけど、またいろいろお話も聞きたい」と書かれていた。

奈緒子は度胸のいいところもあった。彼女が家に帰って十日ほど経った頃「ぼくの母親にも一度会ってみたら……？」という康介の勧めに応じて、彼の家をとつぜんひとりで訪れたのだ。

地上の家も樹も人も熱気に包まれ、すべてが睡ったように静かな暑い夏の昼下がりだった。庭の植込みの濃い緑が部屋の中までしのび込み、ひっそりと暗い座敷の中で扇風機だけが微かな音を立てて、ゆっくりと首を振っていた。

康介の義母ミツが冷やした麦茶を持って入ってくると、彼は奈緒子を紹介した。ミツは、四十五という歳にしてはまだ若く、大柄な女だった。

「ほんとに暑かですね。今日は坂本さんの家においでになっとるとですか」

と二、三言葉を交したあと、彼女は一瞬のうちに相手を見抜いてしまう女の勘で奈緒子の人柄が判ったのか、すぐに奥へ引っ込んでしまった。

縁側に「みす」を立てかけた薄暗い部屋の中で応接テーブルを挟んで康介と話しながら、どこからかいつも誰かに観察されているような気がしていたのだろう。奈緒子の緊張しているのがよく分かった。黙っていると、じっとりと浮いてくる汗に思わずおざなりの言葉が口をついて出る。

「今日は暑かね……」

「ここは風通しがよか方ばってん、やっぱり暑かねえ」

彼女も同じようなことを言った。

康介は、グレーのズボンに白いワイシャツの袖口をちょっと曲げただけの、くつろいだ恰好であった。この暑い時に何故こんな長袖のワイシャツなど着てるのだろうと思っているに違いないが、細い腕を明らさまに見せたくはなかった。

康介はいくらか緊張しながら、しきりに手に持ったうちわを動かしていたが、しばらく沈黙が続いた後に、とつぜんその手を止めると言った。

「ぼくの足を見てみたかとやろう。また、どんな風にして立ち上がるとかもね」

あまりに突然だったので奈緒子は返事に困っているようだったが、彼はさっさとズボンの裾をまくり始めた。膝から下の方は大きく筋肉が盛上がっているが、大腿部の方は普通よりもひと廻り細く見える。

「普通よりもだいぶ細かやろう？　ばってん、走ることは出来んけど、二、三キロなら歩くのは何でもなかよ。階段も手摺りがあれば別にどうということもなかしね」

自分が病気であることを康介はあまり意識していなかった。重い物をかかえたり運んだりは出来ないが、それ以外のことでは日常生活に困ることはないし、やりたいことは何でもできる、といつも思っているのだ。

ズボンの裾を元にもどして、いったん座り直すと、康介は両手をテーブルの上に置いた。それから体の重心を両手にかけて、ゆっくりと立ち上がった。

「もう解ったけんやめて……。早ようここに座ってよ……」

奈緒子は、彼が真面目くさって、体の状態を説明しようとしているのがたまらないのだ。「体のことは、人が普通に生きて行ければそれでよかとよ。ただ、これからどんな生き方をしようと思うとるか、それが知りたかとよ」

もしも結婚した場合でも、どんなふうに自分を愛してくれるのか。また将来に対してどういった夢があるのか、奈緒子はそれが知りたかったのだろう。康介は奈緒子の気持ちに気づいていたが構わずに一人で喋り続けた。

「おれの体の中には人並みに動かせん部分があるばってん、気力だけは人に負けんと思うとるよ。会社の経理などは誰でもできることばってん、そのほかのことも、何でも人並みにはできるしね。それにもともと感激屋やから、映画など観てもいつもすぐに感動してしまうし……。音楽にしても、とてもいい曲を聴いていると、何故かいつも涙が溢れてしまうったい。多情多感というところかね。要するに古色蒼然とした明治の人情型たい。それから、今はこんなサラリーマンばってん、そのうちに税理士の試験を受けて経理事務所をやってみようと思うとる。これくらいは何とか実現できると思うよ」

康介は少し饒舌になり過ぎたと思って、急に口を閉ざすとあらためて奈緒子の顔を見つめた。

「お話を聞きよると、わたしも、あなたなら何でもできそうな気がしてくるとよね。それにあなたの、何にでもすぐに感動するというところが好きよ」

奈緒子はそう言うと、自分の不用意な言葉に気がついたのか、少し顔を赫らめた。

初めて会った時には互いに気がつかなかったが、何度か会って気心が分かってくるにつれて、奈緒子の方も何となくこのままで終りたくないという気持ちが出て来ているようにも見えた。少なくとも、からかい半分に冗談めかして言い寄ってくる男達とは違うものがあると思っていたのだろう。

それからさらに何度か手紙の行き来があったが、康介は夏も終わりに近づいたこの頃になって、奈緒子のはっきりしない態度に少し苛立っていた。そこで今度の手紙には、「中途半端な状態でこのまま続けるのはいやだから、イエスかノーかをはっきりして欲しい。ぼくはあなたが好きだ」と書いたのだった。

いつものように、昼食のために家に帰ったときのことである。誰もいない応接間で

鳴っている電話に出ると奈緒子だった。
「今ならあなたが家にいる時間と思うて掛けたとばってん……。少しでも早よう言いたかったけん、家の者に分からんごと、いとこの加代ちゃんの家に来て電話しよるとよ」
その家まで駆けて来たのか、奈緒子のはずんだような声が聞こえた。それからちょっと躊躇(ためら)ったような空白の時間があった後、
「この前の返事ばってんね……。イエスのほうにとってもよかよ」と言った。
「そう……。ありがとう」
康介はそう言っただけで、もう言葉が出なかった。

その翌日、この町のどこにいても聞かれる、眠気を誘うような製材機の音を聞きながら、事務所の机に向かっていた午後のことである。発送係の女事務員が掛かってきた電話に出ると、すぐにこちらを向いて、
「岡田さんに電話です。女の人からよ……」
と意味ありげ気な眼をして笑いながら言った。出てみると奈緒子だった。
「いま伯母さんの家に着いたところよ」
と彼女のはずんだ声が聞こえた。
月末の締め切りに追われていた康介は咄嗟に、近くにある筑後川の浮き桟橋を思い出した。この桟橋は一、〇〇〇トン級の貨物船も横付け出来るという岸壁でもあって、ふだん
はあまり人気(ひとけ)のない場所である。彼は手短かにその場所を指示して、五時半までに行くからと言って電話を切ったのだった。
製材工場の終業ベルが鳴って、十分ほど経った頃に康介は会社を出た。八月も終りになると、五時を過ぎればもうそれほど暑さを感じなくなる。どこから聞こえてくるのか、降るようなひぐらしの声を耳にしながら、康介は浮き桟橋の方へ歩き出した。
人口五万の大川市は、江戸時代に舟大工の榎津久米之助が、筑後川を下ってくる筏を原材料に、榎津ものというタンスを作って木工業を発展させてきた家具の町である。町中至るところに家具の工場があり、その数は約一、〇〇〇社とも言われたが、どんな小さな道を歩いていても、どこか遠くから飛行機でも飛んでくるような木工機械の音が間断なく聞こえ、大通りでも必ずどこかで丸太を運ぶ荷馬車や、家具などを積み込んだ大型トラックに遭遇する町であった。

その材料を供給する為に花宗川の堤防沿いに建てられた製材工場の多くは、事務所の前が広い原木置き場になっている。丸太の大きさによって数か所に仕分けられた原木の山を右に見ながら堤防に上がると、木材の産地である日田の山奥から先ほど流れ着いたばかりの、十二枚の筏が岸に繋がれていた。

筑後川の河口に近いこの町は干満の差が大きく、満潮になると荷を積んだ船がよく出入りをしたが、その荷を積み降ろしする浮き桟橋は、康介の勤めている会社から五百メートルほどしか離れていなかった。今頃は奈緒子のほうがもう先に着いているかも知れない、と思うと康介は足どりが速くなった。

遠くに見え始めた浮き桟橋には、今日は船の姿もなくほとんど人影も見当らない。奈緒子はまだ来ていなかった。康介はその中央付近に設けられた危険防止の柵まで歩いて行くと、これに寄りかかって奈緒子を待つことにした。

彼女はすぐに現れた。もう秋を感じさせる臙脂色のワンピースで、康介のほうへ真っ直ぐに向かってくる。康介は紺の上衣を着てきてよかったと思った。

奈緒子は彼の側に並んで空を見上げた。まだ明るい夏の空がどこまでも拡がっていた。

船着き場から百メートルほど離れた前方に、民家が横に並んで建っている。岸壁には、桟橋からだいぶ離れて十トンくらいの小さな舟のマストが数本見えるだけで、他に視線を遮る物は何もなかった。二人の足はいつのまにか下流の堤防の方に向かい、肩を並べて歩き始めていた。

もう言葉を交す必要はなかった。ただ黙って互いの存在を感じながら歩いているだけでよかった。少し歩くと、堤防わきに小さな神社があった。どちらからともなく、風雨にさらされて木目の浮き出した社殿の階段に腰をおろすと、互いに身の周りのことを思いつくままに話し合った。

話すことが無くなるとまた歩いた。そして再び浮き桟橋へ戻って来ると、鉄パイプで作った危険防止の手すりにもたれて、満ちてくる潮の流れを見つめた。

太古より悠々と流れ続けてきた筑後川は、田や畑を潤して、南に広がる有明海に注いでいた。だが、遠くの山に月が出る頃になると、いったん海に沈んだ水は再び生まれ変わり、

不知火(しらぬひ)海から押し寄せる上げ潮に乗って帰って来るのだ。有明海は海全体が隆起して、干潟の泥を含んだ潮がさざ波を煌めかせながら河口を潤し、岸辺にひたひたと打寄せていた。時折り風が吹いてくると海の匂いがした。

対岸の堤防は葦に蔽われていたが、ずっと川下の方には小さな茂みや農家が点在し、その先の遠くに、うす紫にかすんだ雄大な雲仙の姿が見え、赤く燃えて沈もうとする大きな太陽があった。大気は淡黄色に染まり、次第に空の青に溶けて刻々とその色を微妙に変えて行く。やがてその熱の塊りが光芒を放ちながら山の蔭に隠れてしまうと、夕焼けの雲と空の色は更に輝きを増したような気がした。

彼は奈緒子の肩に手を置いて後ろに立ったまま、黙ってこの光景の中に身を任せていたが、奈緒子の耳許に口を寄せると、

「大自然の美しさの前に立ったら、もう恍惚として言葉も出んごとなってしまうね」

と言いながら、声が少しかすれるのを感じた。

「このまま、この日没の情景を切り取って、いつまでも瞼の奥に残しておきたかよね。そして今のこのひと時を、永遠にあたいたちのものに出来るならよかばってんね」

奈緒子が彼を見上げるようにふり返ったとき、康介の手は肩を滑って、彼女を抱き寄せていた。

夕靄のただよう筑後川の堤防を、それから康介たちは時の経つのも忘れるほどに歩き回った。しだいに夕闇も濃くなり、人の顔も見分けられぬ頃になって船着き場まで戻って来ると、再びめぐってきた十三夜の月が空にあった。このやわらかな光から隠れるように、川端に立っていた深い庇の農業倉庫の壁にもたれた康介が、奈緒子の背に腕を廻して話をしている時だった。

「あなたの腕はやっぱり細かね」

少し遠慮がちではあったが、奈緒子が小さな声で言った。

「うん、これが元どおりに太くなればね……」

康介はそう言うと、あとは黙ってしまった。口にしてはならないことを言ったような気になっている彼女のせつない気持ちが伝わってくる。足が治らないとすれば、この腕も現在より太くなることはないのだ。

「ほんとにはがいかでしょうね」

康介がそれに答えず黙っているのをみると、奈緒子は彼の腰に廻している手に急に力を入れて言った。

「早ようよくなってね……。あなたの言いよった広島の病院へ行って、少しでも早ようよくなって……。あたいは、あなたに何とかしてようなってもらいたかとよ」

康介はどうにかして彼女の期待に応えなければ、と強く思わずにはいられなかった。

翌日、夕闇が迫る頃になって、康介は花火大会が行われる船着き場へ向かった。打ち上げが開始される八時少し前に、奈緒子と跳ね橋の上で会う約束だった。

時間を気にしながら康介は橋のほうへ急いだ。ドーンと胸の底を揺るがす音がして、しばらくすると、暮れかけた空の頭の上で赤い大輪の花が開く。パラパラッと爆薬の破裂する音がその後に続いた。花宗橋は浮き桟橋の広場へ向かう人で溢れていた。幼い女の児を抱いた若い父親や急いで駆けて行く子供たち、うちわを手に持った若い恋人たちや中年の夫婦……。様々な人が目の前を通り過ぎて行く。奈緒子が彼の姿を認めるとすぐに近づいて来た。

「もう始まったごたるよ。早よう行こう」

頭上の空を弊う大輪の花火の数が増えていた。たたみかけるように胸に響いてくる花火の音がはやる心をせきたてる。

広場はすでに溢れるような人で埋まっていた。桟橋から見える筑後川の小さな中州に仕掛けられた打上げ台から、するするするっと微かな光が尾を引いて空へ翔け昇って行くの

が見える。それが天に届いたかと思うと、ぱっと開いて、赤や青や黄色の火花が空を彩(いろど)りながら胸の中まで降りそそいでくる。

それから時の経つのも忘れてしまうほどに、光の乱舞が夜空を幾度もくり返し彩(いろど)った

あと、やがて待ちに待った華やかなフィナーレとなった。

次々と上がる打上げ音と共に天に達した火花の群れは、目も覚めるような様々な色や形の大輪の花を空いっぱいに咲かせた後、最後にどーんと大きな音で終ると、広場を埋めていた人達も、もっと見続けていたい気持と充足感の混じった顔で少しずつ散り始めた。うち続いた花火の硝煙のためか、広場の周辺はうす明るい空気に包まれている。

「華やかな美しいものを見たあとは、何となく寂しいもんよね。でも、時々はこうして打ち上げる場所まで来て、花火を見るともまたよかね」

坂本伯父の家の方へ向かって歩きながら、奈緒子は満ち足りたような口調で言った。

「そうやね。――おれもこげんゆっくりと花火を見たことは初めてやった」

と言いながら、康介は今まで見ていた色彩の饗宴と、その後に訪れた闇の空しさを考えていた。

この夜空を彩る煌きは、次々と追いかけるように繰り出される光の幻影に過ぎない。すぐに光は深い夜の空に吸い込まれるように消えて、残るのはこの暗い闇の空しさだ

けである。人はこの世の不安と孤独を抱えながら毎日を生きてゆく中で、この一瞬の陶酔に浸るだけで満足するしかないのだろうか。しかしまた、このひと時の感動に身を任せることこそ、人生の歓びなのかも知れない。と康介はそれぞれの家へ帰っていく群集の中で、ゆっくりと歩みを進めながら思うのだった。

坂本木材の工場の周辺は、幾つかの製材工場とその住宅に囲まれているので、前の広い道路には人通りも無く、子供のいない伯父たち二人だけの家はもう灯りも消えていた。隣接した広い工場の片隅に、ひっそりと立っている電柱に付けられた黄色い外灯が、薄暗い足元を照しているだけである。

奈緒子が事務所の隣にある材木置場に入って行くと彼を手招いた。そこは四メートルば
かりの下屋(げや)をおろして屋根を葺いただけの狭い場所で、壁のない空間には木材が立てかけられていた。置場の両側には厚板が平積みにされていて、中からは表の通りがよく見えるが、外側からは内部が暗くて、人がいるのも気がつかない。立てかけた木材の間から僅かに月明かりが差し込んでいた。

康介は置き場の中に入って行き、一メートルほどの高さの厚板の上段に腰をおろした。奈緒子も同じように、横に並んで座るとまた話し始めた。

康介は将来の話になってくると熱がこもってきて、訥々とした話しぶりではあったが、しだいに雄弁になった。だがもう充分に話したと思っても、彼は自分の言っていることがどれだけ奈緒子に伝わっているのか不安だった。時間はどれだけあってもまだ足りなかった。奈緒子にとってもそれは同じであったに違いない。

「じゃあ、今日はもうこれで」と康介が帰ろうとすると、

「もう帰ると……？　もう少しおってもよかやんね」

と奈緒子は彼を引止めた。家では、十二時を過ぎても帰って来ない康介を心配して待っている父親が眠れずにいる筈である。彼女の伯母にしてみてもそれは同じことだ。だが、何ということもないとりとめのない話であっても、彼と一緒にいたい奈緒子の気持ちは解るような気がした。

「うちの門限は十一時やから」と彼が何度言っても、このまま去ってしまえば、しばらくは又会えなくなるのが寂しいのか、

「もうちょっとだけ……」とその度に奈緒子は先へ延ばし、なかなか帰そうとしない。

こんなに月のきれいな夜は早く寝てしまうのが惜しい、と奈緒子は言う。一人家にいる時は、部屋の灯りを消して縁側に座り、木々の梢に降りそそぐ月の雫を見ながら、時を忘れてしまうのだ。そう奈緒子が言うのを聞きながら康介は、おれの考えている

ことと同じだな、とまた改めて思うのだった。
「もう少しだけよかね」「もうちょっと……」と繰り返すうちにいつのまにか朝の冷気がしのび寄っていた。どこかで一番鶏が鳴いた。周辺の家がまだみな寝静まった夜明け前、ただ一軒だけ灯りのついた近くの豆腐屋の店先で、大豆をつぶす機械の音がし始めた。
「もうすぐ夜が明けるよ」
そう言って立ち上がると康介は、ぼんやりと電柱の蔭に立ちすくんで見送る奈緒子の視線を背中に感じながら、夜明け前の道を家へ向かって歩き出した。

三、

彼岸を過ぎて、日差しもやわらかくなり始めた頃、康介は奈緒子を誘って、十キロほど南にある城下町柳河の「川下り」に出かけた。
繁華街から少し東に外れた、掘割に囲まれた三柱神社の広い参道は、人影もなく静かだった。両側に立ち並んだ楠の樹の、繁った葉の間から青い空が見えた。康介たちはいつものように、黙ったまま歩いていた。話し始めれば時間を忘れて話し続けるのに、こうして肩を並べて歩く時は黙ったままでも、ただそれだけで充分だった。参道を社殿の近くまで歩いて、また戻ってくると「川下り」の乗船場に出た。柳河城趾を中心にして張り巡らされた、掘割の風景を観て回る遊覧船であった。
康介は乗船券を買うと、枝垂れ柳の下をかいくぐって乗船場へ降りた。何艘か並んで繋がれている「ドンコ舟」の中の一艘がこちらへ寄って来る。掘割の中に突出ている乗り場に横付けになると、康介は船頭の手を借りて舟に乗り移った。奈緒子も続いて乗り込む。
少しでも体を動かせばその度に舟が揺れるので、二人は莫蓙（ござ）を敷いた舟底にすぐに座ることにした。
もうシーズンを過ぎているせいか乗客は少なかった。中央に座っている彼等から少し離れて、船首の方に中年の夫婦が乗っているだけである。船頭から竹の皮で編んだバッチョ笠を渡されてこれを頭に乗せると、舟は滑るように進みはじめた。水紋がひろがり対岸の柳の影が揺れる。国道橋の下を潜ると、ぐっと視界の開けた掘割へ出た。
艫の方に立っている船頭の持った長い竿が立ち上がったと思うと、次第にこの竿が倒れて行くにつれて舟は前方に進んで行く。両岸の石垣や家々は静かに流れるように後ろへ去って行った。数百年の昔から、先人達も家や木や畑をこうして目の前に見な

がら、刻々と遠ざかって行くのを見つめて、時の流れを感じたに違いなかった。
「とても静かねえ。――何か、違う時代にタイムスリップしたような気がするよね……」
と奈緒子が動いて行く岸辺の柳を見ながら言った。
康介は黙ったまま前方を見つめながら、公園を歩いている時に奈緒子の言った言葉を、何度も思い返していた。
「あたいにいつも嫌がらせをするあのユキ叔母さんが結婚に反対しよるとよ。うちの両親は、お前がよかと思うなら行きなさい、すべてお前次第、と言うとばってん、ユキ叔母さんはあたいが幸せになろうとすることには必ずいつも反対してくるとよ。あの人はあたいをいじめて楽しみよるとよ」
「そのことなら何も問題はなかよ。そこを出てさえしまえば、ユキ叔母さんからも逃げられるとやろが……。もっともそれはあんたの気持ちが、はっきり決まってからのことばってんね」
と康介は答える。
「でも、ユキ叔母さんの言うことには誰も逆らえんとよ。あたいがもしどれだけ好きになったとしても、結婚するまでにどんな邪魔をされるかわからんし……。そしたらまた、伯父さんやあなたたちに迷惑をかけることになってしまうでしょう？」
舟は大きな欅（けやき）が枝を広げている下をくぐって進んで行く。何故か両岸の家は、静かな
音の無い世界に建っているように見える。人の住んでいない、ただの絵のようだ。
左岸の家の傍に、掘割に降りてくる幾つかの木の段が作られていて、その突端にしゃがんだ若い女が、洗濯物をすすいでいる。その波紋が円を描いてひろがり、水に映った女の影が揺れていた。
「それにあなたのお母さんのことも、とても心配になってき始めたとよ」
坂本の伯母の話によると、康介の母親はとても口が悪いからお嫁さんは大変だ、と近所の人が言っていた話を奈緒子は聞いたのだった。
「あたいはそんなお母さんについて行けるかどうか、ぜんぜん自信はなかしね」
「それはこのおれにしっかり掴まってさえいてくれれば問題はなかよ。おれがいつもついてるよ。どんな時でもおれはいつも奈緒子の味方やからね」
康介はまた強い調子で言った。
しかし、奈緒子が不安に思うのもまた当然のことだった。彼の母ミツとの間の問題は、彼の一方的な譲歩によって切り抜けられたことが多いのだ。だが、これは彼が奈

緒子を守って行く気持を失いさえしなければいいことであった。
また、もう一つ気になることがあった。数日前のこと、同じ町内に住んでいた奈緒子のもう一人の叔父が、突然ふらりと出て来ると、彼女の部屋に来て言ったという。
「せっかく進みよる話に水をさすようで悪かばってんね。ユキ叔母さんがえらい反対をしよるらしかやんね。俺も直接に聞いたわけじゃなかばってん、その気持ちは分からんでもなかさい……。その人は足の悪かそうやが、その他には何もなかとやろうね」
叔父が奈緒子を傷つけぬように、遠慮しながらそれでも敢て言わずにはいられないという気持でいることがよく分かった。
「叔父さんにまで心配をかけてごめんね。でも、あたいの目でちゃんと確かめて決めたかとよ。……そいけん、もうしばらく黙って見とってくれんね」
「それは勿論そうするつもりばってん、結婚は人柄とか好き嫌いだけで成立つものじゃなかけんね。家の中の物一つを動かすにしても、男の手が欲しか時もあるし、今はお父さんや若い職人が何人もおらすけんよかろうばってん、将来はそれもどうなるかわからんしね。二人で買い物に出かけても、荷物は全部自分が持つ覚悟でおらんばならんし、子供が出来たらそりゃあまた大変よ。そがんとが何もかんも、あんた一人の肩にかかって来るけんなあ」
養子の叔父が言ったその言葉は、まだ耳の底に残っていると言う。
前方から同じ型の舟が近づいて来る。船頭が竿を持ち直してまっすぐに立てたと思うと、また少しずつこれを倒しながら舟を進めている。酒に酔った乗客の一人が隣の客に何か言いながら笑いかけると、こちらを向いて、
「いよっ、お二人さん！」と手を上げた。
百年以上は経ったと思われる土蔵のナマコ壁が不意に現われ、また遠去かって行く。楠の木立と灌木の茂みが現われたと思うと、先刻笑い合った者達と同じように後ろの方へまた流れて行く。康介はこれ迄に出会っては別れた人のことを思い出していた。人は偶然に出会い、別れる理由があって別れて行くように見えるがそうではなく、天は生涯を通じて寄り添って行く人との出会いのために、人との別れをいつも用意しているのではないか、とふと思ったのだった。
晴れていた空に薄雲が拡がり始めていた。その空の色を映して掘割の色も少しずつ鉛色に変わっていった。

十月になると、この町から対岸の町に向けて架橋中であった筑後大橋が完成した。

華々しい開通式が行われ、筑後川は歩いて渡れるようになった。
奈緒子は、自分の家の近くに康介が来ることをあまり好まなかった。変な噂が立っても困るからだろうが、大橋が通れるようになってからはもう叔父の家に泊まらなくてもよくなったので、自転車で三十分以上はかかる道を、週に一度は橋を渡って出て来るようになっていた。近くの駅に自転車を預けておいて、七時頃になるといつも跳ね橋の上で待合わせた。そして十時になるとその自転車でまた大橋を渡って家へ帰った。
康介は一度、夕闇の迫る頃に二人で砂利道を歩いている時、突然小さなくぼみに足をとられて前のめりに倒れたことがあった。右の膝をしたたかに打っていた。歩行中に転ぶな
ど初めてのことである。いったん靴を脱いで、痛みを怺(こら)えながら辛うじて立ち上がると、彼は破れたズボンの膝を気にしながら泥を払って歩き始めた。だが倒れた時には、彼は咄嗟にどうしてよいのか分からず、黙って傍に立っている奈緒子の気持ちを考えると、彼はどんなふうに説明していいのか分からなかった。
彼は男性としての機能も正常であり、何の不安をも感じることはなかった。しかし、これでは奈緒子を幸せにしてやることはできないのではないか、という思いに彼は襲われたのだった。自分はこのまま引き退るべきではないのか。所詮、自分が普通に幸せになるのを求めること自体が間違っているのかもしれない。もしもこのまま、病勢が進行していった場合にはいったいどうなるのか。それを考えると、矢張り彼はもう奈緒子を求めてはいけないのだと強く思った。康介はもう黙りこんで歩き続けるしかなかった。
「何も気にせんでもよかよ」
突然、肩を並べて歩いていた奈緒子が言った。
「あなたの体が少々不自由やったとしても、あたいはそれでよかとよ……。考え方がしっかりして、前向きに生きていくとなら、それで充分じゃなかね」
「ありがとう」康介はそう小さく言うしかなかった。
いつか二人はまた花宗橋の上に来ていた。跳ね橋は上がっていて通れなかった。あたりには人通りもなく、暗い雲が低く垂れこめている。橋のたもとの、木の電柱にとまった傘の下の裸電球が、暗い夜道をぼんやりと照していた。
時が移ればすべては変わるものだ。今日の考えが昨日と同じでなければならないという理由はない。彼女が結婚したいと言ったとしても、康介はそれをまだ全面的に信じることは出来なかった。まして、奈緒子の心がどう変わって行こうと、それは誰も

止められないのだ。この世の流れには、人間の意志を越えた何ものかがあるに違いなかった。康介は自分のこれからのすべてを、その何ものかにゆだねる外はないと思った。

奈緒子は、そんなことがあってからも大橋を渡って康介の許を訪れていた。週に一度はこれから行くという電話がかかってくるのだが、どうかするとまだ三日しか経っていないのに、

「今日も、今から行くけんよかね……。そんなら、いつもの所でね」

と言って出て来ることもあった。日が短くなってくると待合わせの時刻が少し早くなった。康介は五時に会社を出ると急いで家に帰り、入浴と食事を手早くすませて、奈緒子の待つ場所へと急いだ。

今日もまた東の空に、白く冷たい光を投げかける大きな月があった。初めて会った時から三ヵ月近くがたっていた。僅かな通勤客が乗り降りするだけのこの小さな駅には人影もなく、まだ明るさの残っている広場で待っていた奈緒子の顔がほんのりと白かった。

康介は黙ったまま歩き出した。すぐ近くに、大橋ができてから廃止となった、筑後川の渡し場があった。僅か一坪という小さな切符売場は、閉ざされたまま荒れ果てていた。三十センチほどの平たいグリ石を一面に並べただけの、なだらかにくだった渡し場を川の方へ降りてみる。もう満潮が近いのか干潟も隠れてしまうほどに水位が上がり、岸辺にうち寄せる波がひたひたと音を立てている。筑後川に架かる長さ五百メートルにも及ぶ鉄橋があり、大きな船がその下を通るたびに、レールのついた大きな橋桁が上がるという国鉄の開閉橋が左手に高くそびえ、夕陽の残照に輝く雲を背景に黒く浮かびあがっていた。これもまた大きな跳ね橋であった。

康介がまた歩き始めると、彼女も黙って肩を並べて寄り添ってくる。赤い煉瓦塀に添った道を少し歩くと、左手にいまはもう使われていない青年学校の校舎があった。その手前に崩れかけた煉瓦塀の裂け目があり、それを潜って中へ入ってみる。南に面した校舎の壁にもたれると、前方には遮る物もなく、民家の瓦屋根の上に、冴えざえと光る冷たい月が地上を照していた。

康介は彼女の方に向き直ると、初めてその背に手を廻した。彼女の白い顔が、真昼のように明るい夜の中で、月の光を受けて浮かび上がっている。彼は思わず彼女を引き寄せていた。

彼は左手で彼女を抱いたまま、右手でその肩にかかった髪を、飽きることもなくい

つまでも撫でていた。彼が背中に垂れ下がった髪をその手で握ると、きっちりと五本の指の中に包まれてしまうのだ。その髪は彼の掌の中で愛撫される度に、さらさらと幽かな音を立てた。

このような状態がいつまで続くのか、康介には分からなかった。しかしまた、このままでいい筈もなかった。彼はいつか来る別れの時をどう迎えるべきかをいつも考えていたと言ってもよかった。

高く昇った月の光は家々の瓦や木立や塀や道路に降りそそぎ、地上のすべてが夜露に濡れていた。乳色の靄が川面にたなびき家々を包んでいて、暗い水面には対岸の小さな灯が

幾つも水に映っている。濃い桔梗色の空の中に、すっくと立ち上がった開閉橋の鉄の塔が幻のようにぼんやりと浮き上がって見えた。

「あたいはね……」

奈緒子はゆっくりと彼の耳許で言った。

「これまで迷ったりしとるようなことを言いよったばってんね……。あなたと会って、こうして将来のことを話しよる時はとても楽しいし、これから先もあなたのような人に出会うことはもう恐らく無いと思うとよね。そいけん……」

彼女はそこで一度息をつくように間を置いたあとで、

「そいけん……。あなたと二人で、これからの人生を歩いて行こうと思う。というより、あなたといつも一緒にいたかとよ……」

康介は何か言おうとしたが言葉にはならなかった。

そのとき遠くのほうで、微かにゴーッと地底から響いてくるような音が聞こえ始めた。それは筑後川の鉄橋を渡り始めた列車が刻々と近づいてくる音だった。

レールをゆっくりと刻むその微かな音は、次第に大きくなりながらこちらへ向かってくる。やがていつのまにか鼓膜も破れるほどに膨れ上がった轟音が、こちら側の岸に近い開閉橋の部分を過ぎて、鉄橋を渡り終ったと思うと、目の前の河口の停車駅にいま滑り込もうとしているディーゼルカーの姿があった。

四、

空も青く晴れ渡った晩秋の午後、身近かな親族だけの簡素な結婚式だった。

着慣れないモーニング姿の康介は、数時間も前から落ち着けず、家の中を行ったり来たりしていた。二間続きの広い客間には、すでに宴会の準備が整えられている。親

戚から手伝いに来た娘たちが割烹着をつけて、もう早くから台所に集まっていた。式の始まる予定の三時はもうとっくに過ぎていた。

やがて一時間近く遅れて、タクシーに乗った奈緒子と親戚の一行が到着した。これを見ようとして、四、五十人ばかりの近所の主婦や子供達が、玄関の前に集まっていた。

康介が廊下の奥のほうに立っていると、白い角隠しに花嫁衣装を着た奈緒子が、玄関の敷居をまたいで入ってくるのが見えた。康介は、彼女がいま自分の妻になろうとしているのが信じられない気がした。七、八人の親戚がそのあとに続いている。彼は激しい胸の動悸をもて余していた。両親が玄関に出迎え、挨拶をしている声が聞こえる。彼はふと自分の顔が緩みっ放しになっているのではないかと思った。茶の間にある鏡台の前に行ってそれを確かめ、早くどうにかして気を引き締めなければならない、と思っている自分に気がついて苦笑した。

金屏風の前に奈緒子と並んで座ると、仲人の挨拶に続いて固めの盃が始まった。すぐに蔭謡いの声が朗々と部屋にひびき始める。広縁に面した植込みのむこうに、ブロック塀によじ登った子供たちの顔が幾つも並んで見える。康介がまず盃を飲み干すと、奈緒子が続いて盃を取った。お白粉を塗った白い指先が激しく震え、赤い盃がゆらゆらと揺れている。多くの人に見られて緊張している彼女の胸の鼓動が伝わってくる気がした。彼は今にも彼女が盃を取り落としはしないかと気が気ではなかった。

暮れ方から始まった祝宴は夜の更けるまで続いた。奈緒子の従姉妹達の踊りが入り、父の取引先でもあるフスマ屋の辰さんがもろ肌を脱いでの蛸踊りが始まった。開け放った広

縁から晩秋の冷たい風がしのび寄り、それと入れ替わるように、宴(うたげ)に酔う華やかな

歓声

と

賑やかな三味(しゃみ)の音が夜空に散っていった。

空はどこまでも青く、晩秋のやわらかな午後の日差しが野や山に満ちていた。

収穫の終った稲の束が農家の軒先ほどの高さに野積みにされ、畔(あぜ)ごとに整然と並んだ稲の切株が、白く乾いた土の上に遠く山の裾まで続いている。筑後平野を横切って滔々と流れ下る筑後川を左手に見ながら、二人の乗ったタクシーはこの川の上流にある日田盆地の温泉町に向かって進んでいた。三日間にわたって続いた披露宴のあと、なるべく近いところでという奈緒子の希望で二泊三日の旅行だったが、家を出がけに

見送ってくれた佐太郎とミツの安堵したような顔を思い浮かべながら、康介は移りゆく窓の景色に目を注いでいた。

車は久留米市から田主丸と吉井の町を過ぎて、山あいの県道を進んでゆく。山間部に入ると急に濃い緑が多くなった。杉の美林の間から垣間見える眼下の渓谷の眺めや、淀んでいる渕の中ほどに佇む白い鳥にも鮮烈な印象を覚えながら、康介はいま生きている歓びを強く感じていた。このタクシーは近くの顔見知りの運転手なので、それが気になって奈緒子とはあまり話も出来ない。つい黙り込んでしまうことの方が多かった。康介は黙ったまま奈緒子の白い手を取った。指先の細いわりには根元のほうが少し膨らんでいる。その裏を返すと、ふっくらとした指の根元に四つの小さな笑くぼがあった。明るい陽の光の中で、奈緒子の手を間近かに見たのはこれが初めてであった。

大きな旅館だった。広い庭園の中の長い渡り廊下を歩く。その廊下の東側に止り木のように突き出た幾つかの離れ座敷が造られていて、そのうちのひとつに案内される。それは八畳に次の間のついた数寄屋風の造りだった。

大きな丸い食卓に並べられた料理は食べきれないほどだった。食事が終わると、陶器の大火鉢の向こうに座っている、

宿の浴衣(ゆかた)に羽織を重ねた奈緒子に康介が言った。

「こちらへ来て、此処に座らんね……」

髪をショートカットにした彼女は、立ち上がって大きな火鉢を回り彼の傍へ来て座ると、黙ったまま体を凭せかけてくる。

「こうして、これからのことを話そう」

康介はその胸に彼女を抱き止めて、ゆっくりと語り始めた。

彼はこれまで大きな望みを持つことはなかった。平凡に生きて、生の終る時が来るまで、人並みに暮らせればそれでいいと思っていた。愛し合える人とささやかな家庭を持ち、子供も何人かいて、普通に育てることができればそれで充分だ。殺伐とした社会の片隅のささやかな幸福、それこそが彼の求めるものだった。苦しい時に、自分を支えてくれる人がいつも傍にいてくれればそれでいいのだ。康介は逆境に育てられ、何度も病気の試練に耐えてきた。だが、そのことを考えれば今のこのひと時は、これまでに想像したこともない至福の時だった。

奈緒子は彼の言葉を黙って聞きながら、頭を彼の胸に埋めていた。初めのうちは、時々笑いながら彼の言葉にも答えていたが、いつのまにかそれはすすり泣きに変っていた。彼は不意に何か胸をつかれるものを感じた。

それは憐みなのか同情なのかそれとも――。しかし、同情ならばいらないと彼は思った。安易な同情はかけて欲しくない。いま彼女の胸中にあるものはいったい何なのか、彼はそれが知りたかった。

奈緒子と結ばれることで、ここに一つの答えは出た。だがこれですべてが解決したわけではなかった。これからの生活にどう立ち向かって行くのか、多くの問題を抱えての新しい出発であった。そのためにも奈緒子の心の中の真実を知りたいと思うのだ。だが奈緒子は激しく泣き続けるだけである。康介は声をかけることもできないまま、彼女をいつまでもそうして抱き続けているよりほかはなかった。

枕許の行燈（あんどん）風の灯りが、ぼんやりと天井を照していた。部屋はひっそりと静まり返って

、どこか遠い所でラジオから流れる音楽が微かに鳴っている。康介は床についた今、やっとこの数日間の周囲に対する気苦労から解放され、自分を取り戻していた。

康介があれこれとひとり思いをめぐらせていると、横に並んだ布団に寝て今まで黙っていた奈緒子が、上を向いたまま呟くように言った。

「もう眠ったとね……？」

彼女もまた同じように眠れないのであろう。

「いや、この二、三日の間に起こったことを思い出しよったったい」

康介はつい先程激しく泣いた奈緒子のことを考えていたのである。どうしても気になって仕方がなかったのだ。

「さっきは、どうしてあげん激しう泣いたと……？」

奈緒子は、彼の胸にもたれて話を聞いていた時に、不思議なほど胸がこみ上げて来たのを思い出しているのか、しばらく黙ったあとに言った。

「悲しかったからじゃあなかと。――また可哀そうに思うて同情したわけでもなかとよ。ただ、式の情景やその後に続いた披露宴で、あなたのお友達の喜んでくれた顔、それに苦しいことの多かったこれまでの家のことなどが頭に浮かんでくるうちに、いつのまにか涙が溢れてきてどうすることもできんやったとよ。――あたいはね……」

と何か言いかけて奈緒子は康介の方を振り向いた。康介は黙って上を向いたままだった。

「あたいは今までずいぶんと辛い思いをしてきたばってん、あなたの方がずっと大きな苦しみに耐えて来たことを考えると、これからは、あなたにもっと幸せになってもらいたかと思うたとよ……。それに、あたいよりも深くあなたを愛せる人は、ほかに

はもうおらんと思うたと……。そして何よりも、もうあなたをこれ以上孤独なままに放って置くことはできんと考えるようになったとよ……」

奈緒子はぽつりぽつりと言葉を選びながら話を続けた。

「あなたにめぐり逢えてほんとによかった、と思うたとよ……。そうしたら、周りのみんなに祝福してもらって、今あなたと此処にこうしていることが何故かたまらないほど幸せに思われて来て……」

奈緒子はそこまで言うと、また胸がつまったのか、言葉が途切れた。

ふと、黄昏の花宗川にかかる跳ね橋の情景が、康介の脳裏に浮かんだ。自転車や、橋を歩いて渡る人たちがゆっくりと橋桁を鳴らしながら通り過ぎる。下流のほうに見える浮き桟橋の船着き場には、積荷を卸した五、六艘の運搬船が、潮が引いて干上がった潟の中に半分埋もれて斜めにかしいでいる。明日の船出を前にして、潮の満ちて来るのを待っているのであろう。跳ね橋の下の水の流れは、狭くなって小さな川のように見えた。

目が覚めると、左手の障子が仄かに明るさを帯びていた。広縁のカーテンの隙間から洩れてくる朝の薄明かりが、細長く縦に映って、障子をほの白く浮き立たせているのだった。

康介が目覚めているのに気づいたのか、奈緒子がそろそろと起き上がって、布団を出て行く。縁側のカーテンを静かに引く音がした。瞼の裏側が急に少し明るくなった。奈緒子

が猫間障子を上げて、下半分をガラスにすると、また布団に戻って来た。

「ね、ねッ。見て。朝焼けよ」

まだ目を瞑ったままにしていた康介が薄目をあけると、明けかかった夜のまだ薄明るい空の色が、縁側の硝子戸全体に拡がっている。彼は思わず上体を起こしていた。

昨日は気がつかなかったが、この宿は遠く地平の果てまでも見渡すことのできる、小高い丘の上に建てられていたのである。群青に近い広大な空の色は、東の方へ移っていくに

つれて次第にうす碧に変わっていて、山の端の朱鷺色に滲む辺りから始まって東の空

っぱいに、複雑な赤と金色に輝く朝焼け雲があった。

遠くに連なる山々の中腹まで、白い靄が地上を覆っていた。その上のほうに、綿をちぎったような幾重にも重なって横に流れる赤紫の雲の色が、まだ姿を見せない燃え

たぎる日輪から放射される光の中で、少しずつ微妙に変化してゆくのだ。その朝焼けの空は、彼が
今までに見たこともないほどの鮮(あざ)やかな彩雲の光景であった。
それは暗い夜の終わりを告げていた。康介は、長い眠りから覚めた広大な日田盆地が、いまにも姿を現そうとしている日輪に、刻々と染まり始めていくのを見つめながら、胸の奥深くまで光が満ちてくるのを感じた。

〈了〉

《梗　概》

昭和三十年夏のある夕暮、岡田康介は電話で呼び出されて花宗川の跳ね橋へ向かった。電話は見合いの相手奈緒子だった。

彼女とは見合いの翌日に話し合った後で、この話は無かったことにしよう、と別れた筈であったが、いつのまにか東に昇り始めた月を見ながら古い友人のように話していた。

彼女はその後康介の家を訪れ、手紙も何度かやり取りをするようになった。一ヵ月の後、康介は電話で「イエスの方にとってもいい」という言葉を聞いて希望を持ち始めていた。難病にかかっていた彼は断られても当然と、殆ど諦めていたのだった。

奈緒子の方としても、内心ではまだ迷っていた。だが、彼女が康介の許を訪れて筑後川の堤防を散策した翌日、花火大会を見ての帰りに伯父の家の材木置き場で長時間語り合ったりしているうちに、彼女はしだいに離れ難いものを康介に感じるようになっていた。

奈緒子は柳川の「川下り」に誘われるが、話題はどうしても結婚に反対している叔母のことや、口が悪いという康介の母親のことになってしまうのだった。また、いつか彼女を訪れた養子の叔父が「結婚は好き嫌いの問題ではない。生活に苦労が伴うものならよく考え直したがいい」と言った言葉も気になっていた。

秋が来て、筑後川の渡しが廃止され、大橋が架かって車も通るようになった頃、自転車で康介の許を訪れるようになった彼女の気持ちは、いつかしだいに固いものになっていた。　隣県の温泉地へ向かう車の中で、康介は自宅での質素な結婚式のことを思い出しては、ささやかな幸せを感じていた。だがその夜、膝の上で泣き伏す彼女を見て、後悔しているのではと不安になる康介。だがその後の言葉で彼は奈緒子の本当の心を知ったのだった。　一夜明けて訪れた朝焼けに、康介は暗い夜が終わったのを感じていた。

タイトル「筑後川彩雲」

住　所　福岡市南区桧原二ー二六ー二一

氏　名　西村　淳

（ペンネーム）西村　聡淳

生年月日　昭和三年七月十一日生

電　話　〇九二ー五五三ー八〇〇〇

職　業　会社役員

《略　歴》

昭和　二三年　三月　旧制福岡県中学伝習館卒業

〃　二四年　三月　旧制佐賀高等学校（文科乙類）一年修了

〃　二五年　四月　喜多木材㈱入社

〃　三二年　十月　同社を退社、西村製材所を創設

〃　六二年　十月　同人誌「午前」に参加

平成　六年　七月　同人誌「九州文学」に参加

〃　十年十二月　短編集「雪の音」を梓書院より出版

〃　十一年　八月　同人誌を主宰、「玄界灘」創刊号を発行

〃　十二年　十月　長編小説「天翔ける雲」を出版